

二〇二三年度

二月一日午前入試（第一回）

国語（45分）

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、1-1 から 1-10 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

田所健人は科学にのめりこんでいる少年である。田所家は代々、東京タワーの上に虹をかけるという研究を続けてきたが、いまだ果たせずにいた。ある日、健人は東京タワーで警備員に怪しまれ、思わず逃げ出すが、その時に研究内容を記録した大事なノートを落とし、拾われてしまう。

①「『ひいおじいちゃんの時代から、田所家にずっと受け継がれてきた秘密の研究』か。そうなるはずだったんだよな。なのに、どうして父さんは、この研究を引き継がないばかりか、反対までするんだ！」

東京タワーは、スイッチひとつでタワーの上に巨大な虹が架かって完成のはずなのだ。戦後の復興期、曾祖父の正太郎は、「がんばれ、日本！新しい日本をつくらう！」の思いで、タワーに虹を架けたかった。しかし、それを果たせぬまま、正太郎はこの世を去り、健人の祖父である信二が、その意思を引き継いだ。

阪神・淡路大震災のとき、そして東日本大震災のとき、そして新型コロナウイルスによるパンデミックのときにも、信二は「みんなが応援しているぞ」「みんなががんばろう！」と、虹を架けたかった。けれど、それらはいずれも果たすことができなかった。

②「東京タワーは、日本人の心の応援歌なんだ。」という信念のもと、信二は研究を続ける。しかし、健人の父である弘樹は、この研究にまったく興味が無い。そればかりか、うさんくささすら感じているのだ。

「こんな、子どもじみたバカバカしい研究に、自分は巻き込まれたくない。」と。信二がいくら説得してもムダだった。

「息子の弘樹は、まるであてにならない。だから、わしのあとは健人に託したいと思つとる。そのために自分の命が尽きる前までに、できるだけ完成に近づけておかなくてはならん。」

そう何度も口にしてきたのだ。そのことは健人も半分は、わかっている。半分、というのは、「研究の身は引き継ぎたいが、自分ひとりの発想、研究方法を進めたい。だれかの力を借りたり、共同で研究を進めるようなことはしたくない。」という意味なのだ。

つまり、「東京タワーの上に虹を架ける研究には賛成するが、ひいじいちゃんや、じいちゃんの研究の続きをそのまま引き継ぐ」のは、いやなのだ。

「そのためにも必要なのは、やっぱり大学ノートだ。」
その思いを日増しに強くする健人は、いよいよ行動に出ることにした。

「大事なノートを落とした。」とは、だれにも言いたくなかった。それを口にすれば、だれかが救いの手をさしのべようとするかもしれない。自分自身も、だれかの力を借りたくなくなってしまふかもしれない。それだけは避けたかった。

意地なのか、信条なのか、それともプライドか。
それは、健人自身にもわからない。ただ、「ひとりでもやらなくちゃだめなんだ。」という、正体不明の呪縛だけが、健人の体をギリギリとしばりあげていた。

ある日健人は、大人たちには知られないように、こっそりじっくり練りあげた計画に沿って、警備員室にしのびこむことにした。目的はもちろん、ノートを取りもどすことだ。

実行するのは早朝の5時。タワーの営業時間は、10時〜21時半だ。夜に実行するのは親の目を盗むのが難しい。それならば早朝しかない。絵里子が健人を起こしに来るのは朝の6時半。それまでに計画を実行してもどつてくれば問題ない。それに、警備員が営業前の見まわりをするのは8時と決まっている。自分がまいた種は自分で刈り取る。これも健人ならではの、こだわりなのだ。

計画実行前夜、健人はなかなか寝つけずにいた。

「もしだれかに見つかったら、どうしよう。いやいや、時間内に完了すれば、だれにも見つかるはずはない。それより、もしも警備員室にノートがなかったら……。」

いくら心配してもしかたないのはわかっているのに、それでも「もし」が頭の隅から離れない。

「ええい、もう、なるようになれ！」

そう。人生はどうあがいても、なるようにしかならないのだ。それでも眠りは訪れる。あとは寝過ぎさないようにするだけだ。

チリリリリ……。

枕の下で、かすかに目覚まし時計のベルの音がした。いつもなら、頭の上で爆竹が鳴っても起きそうになり健人なのだが、この日はパツと目が覚めた。どれほど朝が弱い子どもでも、遠足の朝には自分で目を覚ますものだが、それと同じである。

物音を立てないようにして、そつと身じたくを整える。さらに小さなリュックを背負って窓から屋根を伝って外に出た。

「やった！ うまく脱出したぞ。」

なんだかもう、半分くらいは成功したような気になった。ここで外靴をはき、まだ薄暗い町へと飛び出す。視線をあげると、東京タワーの最上部は朝霧のベールをまとっていた。手にしたいくつかのカギを鳴らさないように気をつけ、細い路地に入る。と、そのときだ。

「ヤッホー、健人。おはよう！」

なんと、心咲が2階の窓から手をふっている。健人が自宅からタワーへ行くには、心咲の家の横を通るのが近道なのだ。

「なんだよ、心咲。何やってんだ。」

「シーツ、大きな声を出すと、うちの親が起きてきちゃうよ。それより健人。やっと、その気になったみたいだね。あたし、わかってたの。きつと近いうちに健人がここを通る。それも朝早くにね。」

「予言者か、心咲は。」

「何、非科学的なこと言ってるの。下に行くから、ちょっと待ってて。」

と言うが早いか、窓から長いロープを投げおろし、それにしがみついて心咲が降りてきた。吐く息が、もう白く見える季節になっていた。

「だ、だじょうぶなのか、こんなことして。」

心咲がぶら下がっていたのはロープではなく、柔道の帯を2本つなげたものだった。

「だじょうぶ。柔道の帯って、すごくじょうぶなんだよ。あたしのお兄ちゃんが、高校の柔道部だっているのは教えたでしょ？」

⑦「いやいや、そういうことじゃなくて、うちの人心配するだろう。早くもどれよ。」

健人はだんだんイライラしてきた。くるっと向きを変え、先を急ごうとする。その健人の手首を心咲がぎゅっとなつかんだ。

「なんだよ、時間がないんだよ。」

「あら、あたしがどうして健人が今日の朝早く、ここを通ることを知ってるのか、聞かなくていいの？」
「そうだった。それはたしかに不思議だが、今の健人には先を急ぐ方が大事だった。」

「あとで、な？ あとで聞くから、今はその手を離せ。」

「いや、離さないよ。ねえ、健人。あんた、こんなことが本当にできると思ってるの？」

「やってみなきゃわかんないよ。それにこれは、どうしてもやらなきゃならないことなんだ。」
⑧「そう言い切った健人の顔をじっと見つめると、心咲は握った手にもう一度力をこめた。」

「わかった。どうしても行くな、あたしもいっしょに行く。」

「なんで、心咲が行く必要があるんだよ。」

「前にも言ったでしょ？ 健人がどこまで暴走しちゃうか心配なんだって。もし、その暴走のとばっちりが、あたしの方にまで降りかかってきたらいやだから、ひとりじゃ行かせられないの！」
⑨「意味不明な理由だとは思ったけれど、ここで言い合いをしている時間は無い。」

「もう、勝手にしろ。どうなったって、知らないからな。」

根負けだ。

「じゃあ、急ごう。うーん、なんか、『おてんばエリザベス』になったみたいな気分。健人、知ってる？ 『おてんばエリザベス』っていうのは、イギリスの女流作家、イーニッド・ブライトンが書いた小説なんだよ。そのエリザベスがさあ……。」

「おまえ、さっき『心配だからついて行く』って言ったよな。楽しんでるじゃんか。いいから走れ！」

「どうやら健人は、心咲を説得することをあきらめたらしい。」

「こんなに朝早くに、もうジョギングをしている人が何人かいる。その人たちの視線を避けながら、ふたりはカギを使ってスターライズタワーの中にしびこんだ。」

「よしっ、ここまではオッケー。急げ、エレベーターに乗るぞ。」

健人はエレベーターの電源をオンにすると、心咲を無視して中に飛び乗った。本来ならトップデッキまでノンストップのエレベーターだが、この日はメインデッキに臨時停車だ。

「こらっ、あたしを置いてくな。手伝ってやらないぞ。」

「だれが手伝ってくれなんて言った。ぼくは、だれにも手伝ってなんか欲しくないんだ。ひとりでやるんだから、じゃまするなよ。」

などと、あまり建設的とは言えない言い合いをしているうちに、エレベーターはメインデッキに到着した。
腕時計を見る。5時43分。時間はまだ十分にある。

「次は警備員室に行くんでしょ。あたし、ようすを見てくる……。」

「待て！」

今度は健人が心咲の手首を強くつかんだ。

⑩「なんだ、あの人たち。何をやってるんだ？」
作業服を着た数人の男たちが、脚立を使って、メインデッキの天井に長いポールのようなものをあてている。今出て行けば、その男たちに見つかってしまうことは明らかだ。

「あれ、教室に時々来る人たちと同じことをやってない？ たしか、火事の予防のなんとかって。」

「スプリンクラーだ！ スプリンクラーの点検をやってるんだ。おいおい、聞いてないぞ、今日のそれもこんな朝早くに作業をするなんて。」

「まだ営業時間前だから、開けっ放しにしてあるんだね。今度はラッキーじゃん。」

警備員は全員、スプリンクラーの点検につきそっている。^⑫ たしかにラッキーだ。そして、そのラッキーはそれだけで終わらなかつた。

「あっ、あつた！ ぼくの大学ノートだ！」

こんなにあつさり見つかるとは、思ってもみなかつた。目の前のテーブルにポンと投げ出すように置いてあるのだ。

「なんだかラッキー過ぎて、気持ち悪いな。」

そうは思ったが、早く家にもどれることにホッとしたのはまちがいない。そのとき、心咲が健人の肩のあたりをツツンとつついて、こう言った。

「ねえ、そのノートの裏に、メモみたいなものがくっついてるけど。」

健人がノートを裏返すと、そこにはたしかに、茶色に変色した古いメモがはりつけられていた。そしてそこには、赤ペンで走り書きがあつた。

「ええと、ヘリオン……、なんだこりゃ。」

と、そのときだ。ひとりの警備員が、ふたりに向かつて歩いてきた。確実にふたりをロックオンしている感じだ。

「おっちゃんじゃない。」

いつもの老警備員ではなく、見たことのない若い長身の警備員だつた。

「君たち、ちょっと待ちなさい。」

警備員が足を速めた。

「いけね、見つかった。逃げるぞ！」

今度は健人が心咲の腕をつかんで走り出す。^⑬ エレベーターは目と鼻の先だ。

「早く来い、エレベーター！」

下向きの三角マークを連打する。警備員との距離は、およそ20メートル。

「やばっ、つかまる！」

そのとき、エレベーターのとびらが開いた。

「飛びこめ！」

ふたりは、ラグビーのトライを決めるときのように、中へと飛びこむ。警備員の姿がみるみる大きくなつてきた。

「閉まれ〜！」

警備員の顔が、ソフトボールほどの大きさに見えたその瞬間、とびらは音もなく閉まつた。と同時に、下へと向かつて降りていく。

「ふうっ、I だつたな。……心咲？ だいじょうぶか？」

健人を見ると、心咲の目が空中を泳いでいる。

「ううん、あたしたち、今度はインディ・ジョーンズになつたんだね。インディ・ジョーンズっていうのは、ジョージ・ルーカスが制作した映画なんだ。インディは考古学者でかつこよくて……。」

やっぱり心咲は、このサスペンス映画のような状況を楽しんでいるようだ。

エレベーターはいつの間にか、1階に到着していた。すぐさま、コンテナの中に飛びこむ。これは心咲が潜入したときに入った、あのコンテナだ。[※]

「ここまで来れば、もうだいじょうぶだ。あぶなかつたあ。」

健人がホッとⅡをなでおろした。そして改めて、取りもどしたノートに目をやる。

やはり気になるのは、自分では貼りつけた憶えのないメモのことだ。

「なんだろうな、この『ヘリオンネウムー1』って。」

どれどれと、心咲がのぞきこむ。

「ほんと、何だろう。……あれっ、裏にも何か書いてあるよ。」

と、健人の顔を見る。だれかのサインのようだ。

「田所正太郎？ これって、ひいじいちゃんのサインじゃないか。どうして警備員室にこんなものがあるんだ。」

考えてみてもわからない。それよりも健人には、「ヘリオンネウムー1」の意味の方がもつと気になる。

(じいやんに相談してみようか。いやいや、だめだ。)

⑮泡のように浮かんできそうになった気持ちを、強く打ち消す。これが、健人の健人らしいところでもあった。健人は、自分の力で研究を前に進めたいのだ。だれの手も借りたくない。自分ひとりで成しとげることこそ、意味があるのだと。

さらに健人は、東京タワーに虹を架けるといふ壮大なアイデアを生み出した正太郎のことを、心の底からリスペクトしている。その正太郎のサインがあるということは、研究に関係したメモにまちがいないと、健人は確信した。それだから、「このメモは自分が解読して、完成につなげたい。」と思ったのだ。

(山口理『東京タワーに住む少年』より)

※(注)

絵理子

健人の母親。

スターライズタワー

東京タワーの敷地内にある施設。

このずっと上に、おじいちゃんが

祖父の信二は東京タワーの上部にある架空の秘密部屋で研究していると

いう設定になっている。

心咲が潜入したとき

心咲は以前、ふとした拍子に秘密部屋に立ち入ってしまった。

問一 —— 線①「東京タワーは、スイッチひとつでタワーの上に巨大な虹が架かって完成のはずなのだ。」とありますが、田所家の人々は、「東京タワー」に「虹」をかけることにどのような思いをこめていたのですか。解答らんの「思い。」につながるように、簡潔に答えなさい。

問二 —— 線②「健人の父である弘樹は、この研究にまったく興味がない。」とありますが、弘樹は「この研究」に対してどのように考えているのですか。解答らんの「と考えている。」につながるように、二十文字以上三十文字以内にまとめて答えなさい。

問三 —— 線③「自分がまいた種は自分で刈り取る。」とありますが、この場面ではどういうことを指していますか。二十文字前後で具体的に答えなさい。

問四 —— 線④「それと同じである。」とありますが、「それ」とはどのようなことを指しているのですか。簡潔に答えなさい。

問五 —— 線⑤「あたし、わかってたの。」とありますが、なぜ心咲は「わかって」いたのですか。その理由をここより後の心咲の言葉を参考にして具体的に答えなさい。

問六 —— 線⑥「そういうことじゃなくて」とありますが、健人が言いたいのはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 二階の窓から外に下りる行為は危険だということ。

イ ロープよりも柔道着の帯の方が丈夫で安全だということ。

ウ 朝早くに勝手に家を出たことがわかったら大変だということ。

エ 心咲の兄が柔道部かどうかはどうでもいい話だということ。

問七 —— 線⑦「健人はだんだんイライラしてきた。」とありますが、なぜ「イライラしてきた」のですか。その理由をわかりやすく説明しなさい。

問八 —— 線⑧「心咲は握った手にもう一度力をこめた。」とありますが、なぜだと考えられますか。簡潔に答えなさい。

問九 — 線⑨「意味不明な理由」とありますが、なぜそのように思ったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分の行動によって心みさき咲に迷めいわく惑がかかることなどあるはずがないから。
- イ いつも言い争ってばかりいるのに、自分の心配などするはずがないから。
- ウ ふだんの行動から、心咲の本心は好奇心こうきしんと野次馬根性こんじょうだけであると見抜ぬいているから。
- エ 自分の行動を危険だと考え、止めようとしているだけだとわかっているから。

問十 — 線⑩「作業服を着た数人の男たちが、脚立きゃたつを使って、メインデッキの天井てんじょうに長いポールのようなものをあてている。」とありますが、「作業服を着た数人の男たち」は何をしていたのですか。簡潔に答えなさい。

問十一 — 線⑪「ずっとんきょうな声」とありますが、ここではどのような感情がこもった「声」ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 怒いかり
- イ 不審ふしん
- ウ 驚おどろき
- エ 喜きび

問十二 — 線⑫「たしかにラッキーだ。そして、そのラッキーはそれだけで終わらなかった。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 どのようなことが「ラッキー」なのですか。解答らんの「こと。」につながるように二十五字以内で答えなさい。
- 2 「それだけで終わらなかった。」とありますが、どういうことですか。解答らんの「ということ。」につながるように答えなさい。

問十三 — 線⑬「エレベーターは目と鼻の先だ。」とありますが、「目と鼻の先」とはどのような意味ですか。簡潔に答えなさい。

問十四

Ⅰにあてはまる四字熟語として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 危機一髪
- イ 以心伝心
- ウ 右往左往
- エ 先手必勝

問十五

線⑭「ホッとⅡをなでおろした。」とありますが、Ⅱにあてはまる体の部位を表す漢字を答えなさい。

問十六

線⑮「泡のように浮かんできそうになった気持ちを、強く打ち消す。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「泡のように浮かんできそうになった気持ち」とありますが、どのような「気持ち」ですか。解答さんの「という気持ち。」につながるように、文中から十二字でぬき出して答えなさい。

2 健人はなぜその気持ちを「強く打ち消す」のですか。文中の言葉を用いて、四十字前後で答えなさい。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 首位の選手が独走タイセイに入った。
- ② 冬から春への季節のウツリかわり。
- ③ 友達へのプレゼントをホウソウしてもらう。
- ④ トラブルをエンマンに解決する。
- ⑤ 友達の作文をヒビョウする。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 険しい山道を登る。
- ② やせた土地を肥やす。
- ③ 村の古い社。
- ④ 組織的な活動に参加する。

問三 次の①～③の熟語の前に打ち消しの意味を表す漢字一字を付けて、反対の意味を表すようにしなさい。

- ① 完成
- ② 常識
- ③ 理解

問四 次の①～③のものの数え方を表す漢字一字を答えなさい。ただし、「個」は使えません。

- ① 皿
- ② 乗用車
- ③ くつ下

問五 次の①・②の熟語と読み方のルールが同じものを後のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 団子
- ② 雨具

ア 交通 イ 見学 ウ 台所 エ 特別 オ 一発 カ 見本

